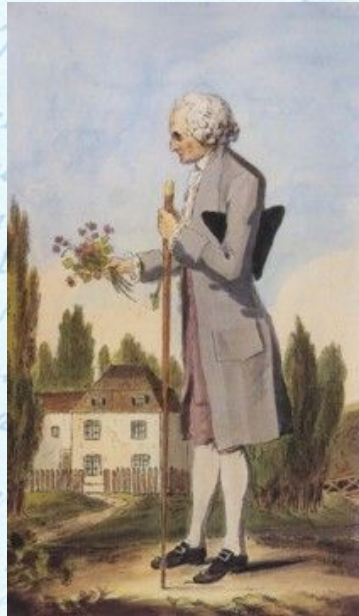


立教大学文学部 100 周年記念シンポジウム「文学を超えて」

## ルソー研究の現在－「作品」の臨界

2007 年 11 月 10 日（土）10 時－18 時  
太刀川記念館 3 階多目的ホール（立教大学池袋キャンパス）



はたして「作品」について語るべきことは残されているのだろうか。その「思想」や「構造」、「主題」はすでに語りつくされてしまったのではないだろうか。今再び「作品」について語るなら、「作品」や「作家」なるものの境界そのものを問い直すことから始めるべきではないのだろうか。政治学、社会学、思想史等、さまざまな領域の第一線で活躍する研究者とともに、作家研究の未来について考える。

・ 09:45－ 開場

・ 10:00－ 開会の辞 吉岡知哉

文学部長挨拶 渡辺信二

・ 10:10－ 趣旨説明 坂倉裕治

### 第一部 文明、啓蒙、反啓蒙－ルソーの「位置」再考

司会 鷲見洋一（中部大学）

・ 10:30－ 井田尚（青山学院大学）

ルソーの学芸論と文芸批判

・ 11:10－ 川出良枝（東京大学）

啓蒙のコスモポリタニズムとパトリオティズム

－ルソーにおける「人間と市民」問題の歴史的文脈

・ 11:50－ 王寺賢太（京都大学）

ルソーと啓蒙－ルイ・アルチュセールの場合

### 第二部 ルソーの「思想」－領有と否認の歴史

司会 吉岡知哉（立教大学）

・ 14:00－ 葛山泰央（筑波大学）

社会契約説の「死」－一言説史的考察

・ 14:40－ 坂倉裕治（立教大学）

日本の近代化と『エミール』

### 第三部 作家の神話、作品の神話

司会 原好男（立教大学）

・ 15:40－ 桑瀬章二郎（立教大学）

ルソーの「統一性」再考－体系、全集、自伝

・ 16:20－ 小林拓也（ヌーシャテル大学）

「博物学の世紀」－ルソーと植物学

### 全体討論

司会 鷲見洋一

・ 17:20－ 各部司会者によるコメント

連絡先: 文学部教育学科 坂倉裕治 [sakakura@rikkyo.ne.jp](mailto:sakakura@rikkyo.ne.jp)

<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/kohoka/info/koenkai/ippan2007/koenkai-1110.pdf>

## 研究報告要旨

### 第一部： 文明、啓蒙、反啓蒙 — ルソーの「位置」再考

井田 尚 (青山学院大学) ルソーの学芸論と文芸批判

『学問芸術論』(1750)は、その後のルソーの思想展開を決定づけたといっても過言ではない重要な著作である。文明の発達と理性の進歩は人間社会を改善するという考えが半ば常識であった啓蒙思想の全盛期に、ルソーは、文芸をはじめとする学芸の発展がむしろ習俗を墮落させ人間を不幸にしたという逆説を唱えた『学問芸術論』で、センセーショナルな文壇デビューを飾った。

啓蒙思想を象徴する『百科全書』(1751-72)の刊行とほぼ同時期に、百科全書派の領袖にして友人のディドロの助言を得て執筆されたとされるこの作品には、多くの作家のデビュー作がそうであるように、ルソーの思想のメインテーマとなる文明批判が凝縮されている。今回の発表では、シンポジウムのテーマとも関連がある文芸批判の観点にも注目しながら、『学問芸術論』を中心とする初期ルソーの思想を百科全書派のフランス啓蒙思想への応答として読み解きたい。

川出良枝 (東京大学) 啓蒙のコスモポリタニズムとパトリオティズム  
— ルソーにおける「人間と市民」問題の歴史的文脈

「人間」であることと「市民」であることの間には鋭い緊張が存在することを強調したのは、ルソーの思想の一つの特徴であろう。だが、議論の密度に程度の差こそあれ、同じ問題は18世紀フランスにおいて、様々な形で論じられていた。たとえば、バルベイリヤックのフランス語訳によって広まったプーフェンドルフの著作の表題は『人間と市民の義務』であった。こうした議論は、哲学的な問題であると同時に、より直接的に政治的な問題であり、とりわけ、人類の一員としての義務とおのれの祖国に対する忠誠は両立可能かという問いかけは真剣に論じられたテーマである。フィロゾーフ等のコスモポリタニズムに対して、ルソーの諸作品にパトリオティズムやナショナリズムの萌芽をみてとる議論も少なくないが、実際にはそれほど単純な割り切り方はできない。政治思想にとって永遠の課題ともいえるこの問題をルソーおよび彼の同時代人の議論を通して再考してみたい。

王寺賢太 (京都大学) ルソーと啓蒙 — ルイ・アルチュセールの場合

政治と歴史の関係を中核に据えながら近世・近代の思想史の再読を試みたルイ・アルチュセールの仕事のなかでは、ルソーと「啓蒙の哲学」と彼が名づける同時代の思想との関係は断続的に、しかし決定的な時点において考察の対象とされている。ここで私たちが検討するのは、1955年から1956年の『歴史哲学の諸問題』と題されたエコール・ノルマル・シュペリールにおける講義、1967年に刊行の『社会契約論』について』、さらに1982年に書かれた『出会いの唯物論の地下水脈』の三つのテキストである。この三つのテキストを通じて、私たちはアルチュセールにおけ

るルソーが、啓蒙の進歩主義的な歴史哲学の「内なる敵」として、あるいは「契約」によって社会的・歴史的な関係を超越しようとした政治哲学者として、そして最後に啓蒙の哲学の地平を共有するのみならず、むしろその地平を最もよく示し得た、歴史の偶然性の思想家として現れるのを見ることになる。それらの変化と、変化のうちにある恒常性を明らかにしながら、現在ルソーを含めた一八世紀のテキストを読み返すことが持ちうる意義を考えることが私たちの課題である。

## 第二部：ルソーの〈思想〉 — 領有と否認の歴史

### 葛山泰央（筑波大学） 社会契約説の〈死〉 — 言説史的考察

この報告では、社会理論の近代を、社会契約説の〈死〉、社会契約説の言説的な葬送儀礼として捉え返す。ジャン＝ジャック・ルソーの『社会契約論』における契約説の限界的な定式化から、エミール・デュルケームの『社会分業論』その他における契約説の〈死〉を巡る様々な言説化、さらには〈社会的領域〉の台頭や「民主主義」理念の動揺を巡る、現代の政治哲学・社会哲学的な考察に至るまでの、契約説の拒絶的受容の歴史を再検討するなかで、社会契約説という言説の歴史を構想することにした。

社会契約説はもはや過去の理説であろうか。むしろそれは〈過ぎ去ろうとしない〉理説ではないか。社会契約説の〈死〉を宣告し続けること。社会契約説の言説的な葬送儀礼を執行すること。しかし他方で、そのような葬送儀礼が絶えず引き延ばされてきた事態は、社会契約説という言説の奇妙な魅力を浮かび上がらせてもいる。「社会的契約から社会的分業へ」という定式化は、恐らく事態を単純化したものだ。というのも、実際には至る所で、社会契約説の〈トラウマ的な反復〉＝契約論的思考の〈再生〉とも呼び得る事態が繰り返し引き起こされているからである。契約説の否定的な形態は、至る所に残存＝〈復活〉している。社会理論の近代は、社会契約説を「葬り去る」という口実の下に、社会契約説の自己否定的な形態、社会契約説の自己否認として姿を現しているのではないか、つまり契約説は拒絶的に受容されているのではないかというのが、この報告での作業仮説である。

### 坂倉裕治（立教大学） 日本の近代化と『エミール』

ルソーが日本の近代化の過程で及ぼした広範な影響力については、これまでも多くが語られてきた。しかし、政治思想（中江兆民）や文学（島崎藤村、森鷗外）といった領域に比して、教育にかかわるルソーの思想の受容については反省的な研究の蓄積が乏しいように思われる。本報告では、菅学応（緑蔭）、三浦關造らの初期の『エミール』の翻訳（抄訳）を読み直し、近代化の過程で、日本の「知識人」が『エミール』をどのように読もうとしたのか、より正確には、『エミール』から何を学びそこねたのか、あるいは、何を学ぼうとしなかったのかという問題に光をあてようと試みる。この作業を通じて、現代の日本で外国の作家・思想家について研究することの意味について、再考してみたい。

### 第三部：作家の神話、作品の神話

#### 桑瀬章二郎（立教大学） ルソーの「統一性」再考 — 体系、全集、自伝

一見矛盾に満ちた諸作品に見えない「統一性」を与えること — スタロバンスキーやカッシーラーの代表的研究が示すように、20世紀のルソー解釈が目指したのは、作品、生涯といった資料体から「矛盾」や「相反」、「非連続性」を排除すること、あるいは理論的著作や自伝、論争書や書簡といった多様なテキストの間に強固な一つの関係性を見出すことにほかならない。いまや自明のものとなったルソーの「統一性」について今一度考えること。それは知らぬ間にわれわれの解釈を制約するものとして機能し始めている「作家」の神話を問い直すことにほかならない。最初期の論争テキストから、厳密な理論化の試みが展開する『対話』にいたるまで、ルソーにおける「統一性」概念の変遷を辿る。

#### 小林拓也（ヌーシャテル大学） 「博物学の世紀」 — ルソーと植物学

ビュフォンの『博物誌』が大成功を収めた西欧18世紀は、「博物学の世紀」とも呼ばれる。時代のキーパーソン、ルソーもその後半生に植物学へ多大な関心を寄せ、『植物学に関する手紙』、『植物学用語辞典のための断片』といった専門的作品や数冊の書込み本、300点を超える自作標本などを残した。

本報告では、この一般にはあまり知られていないルソーの「最後の情熱」を取り上げ、その関心が、「偉大な思想家の意外な一面」といったレベルに止まるものではなく、主要作品や思想体系とも深い関連を持ち、様々な研究展開の可能性を秘めたものであることを明らかにしたい。極力多くの問題を取り上げ、ルソー研究が新たな段階へと向かうためのヒントを提供できればと思う。